第21969号　平成16年1月6日（火曜日）　産経新聞　P.1

平成十六年

はしがき

未来を開く「なにわ女」の力

経済部　納富 優香

“大阪のおばちゃん”は、とにかく大声で話し、笑う。女性経営者になると、さらにその傾向が顕著だ。

そうした“なにわ女”と全国の元気な女性経営者たちが昨年十月、激戦区にほど近いホテルに約六百人集まり、中小企業同友会の全国女性部交流会が開かれた。「女性の元気が未来を開く」をテーマに、厳しい経営環境のなかでも生活者の視点で新たな試みにチャレンジしていこうという活動報告や問題提起が行われたのだが、女性経営者は見方も言い方もストレート。長谷裕代実行委員長が「女性のほうが本音で話せますから」と言っていた通り、分科会では熱い“突っ込み”がポンポン飛び交い、不況なんぴこ吹く風の活気をみせた。

大阪市西区で紳士服販売など手がけるエニーズの川崎昌子社長も、そのなにわ女のひとり。テンポの速い口調と豊かな表情で、迫力にのまれそうになる。女性ばかり約二十人を率いてオーダーメードスーツの企画、販売や店舗運営代行、人材派遣と業務を広げてきた。「女性世帯主は全国で約三百万人に上る。この人らのパワーを生かすとすごいことができる」と、女性の自立支援ができる企業づくりを目指しているが、決して大仰に構えたものではない。「自分がやりたいからやる、できることをする、そこがスタート」と強調した。

個人レベルで起業・独立を支援する交流会「好きな事でメシを食う会（スキメシ）」を運営するフリーライターで企画会社経営の服部貴美子さんも「ビジョンがしっかりしているから、無駄なことはない。後ろ向きな人がいないことが自慢」と言い、やる気だと断言する。

こうした大阪の女性経営者たちに共通するのは、景気わるいおおらかさだ。慢性病ぶりにとらわれず、ものごとを真っすぐにみる。一昔前の「男性社会の中で負けないよう、肩肘張って」というタイプは、もはや、いない。

もうひとつ、「これまで」を捨てる勇気にあふれている。川崎社長は、ブティック四店舗を捨てての転身。服部さんは、野村証券という大会社を飛び出してライターとなった。「何とかなるやろ」の思い切りで本当に何とかしてしまうのだ。

大阪府の経営者に占める女性社長は、制合（そ5・81％で四十七都道府県のちょうど真ん中程度だが、関西経済同友会代表幹事を務める引っ越し大手、アートコーポレーションの谷口千代乃社長を筆頭に発言力は際立っている。彼女たちの真っすぐな見方と率直な表現は、日本の閉塞状況を打破する きっかけになるのではないか。

長引くデフレ不況は、将来不安の裏返しともいえる。確かに若い世代の負担が増える年金制度改革、消費税上げを前提とした税制改革など不安になる要因は多く、消費を控えるのもムリはない。だが、裏を返せば、世界有数の貯蓄率を誇り、個人資産は約千四百兆円に達する。将来は分からないにしても現状は安全保障もしっかりしており、誤解を恐れずに言えば、会社が倒産しようがリストラされようが、健康と強い意志さえあれば、すぐに生きていけなくなるということはない。昨年の新潟・渡行県大賞に入選したように「年収300万円」でも暮らせる。

ある元経営者によると、ビジネスに必要なのは「三つのI」だという。憧憬（イミテーション）に始まり、そこから改良（インプルーブメント）し、さらに変革（イノベーション）できたものだけが生き残っていけるというのだ。二十世紀の日本経済は模倣と改良には優れていたが、改革は苦手として来た。最近は改革はやりたが、個人の意識までは改革できていない。これまでの延長線上に将来を考えるからダメになる。

結局、旧来の殻を打ち破ることのできない東京根性が、閉塞感を強め、将来不安をあおる元凶になっている。がらりと視点を変えれば、閉塞のタネはいくらでも転がっており、元気な経営者たちは、それを見つけることによってパワーアップする。

過去にとらわれず、目の前にあるものをしっかり見つめれば、意外と簡単に閉塞感から脱出できるように思うのだが…。